

研究機関名：東北大学

受付番号： 2013-1-552
研究課題名 胆道閉鎖症の包括的な予後因子に関する後方視的検討
研究期間 西暦 2014年 3月（倫理委員会承認後）～ 2016年 6月
対象材料 <input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名 ） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名 ） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（診療録、レントゲン写真、採血検査データ ）
上記材料の採取期間 西暦 1991年 1月～2014年 2月
意義、目的 胆道閉鎖症は新生児期、乳児期早期に発症する難治性の胆汁うっ滞性疾患である。治療にはまず肝門部空腸吻合術を行うことが一般的であるが、日本胆道閉鎖症研究会の全国登録によると本手術により黄疸が消失する割合は6割程度である。このときに黄疸消失を得た症例も、その後に胆管炎や門脈圧亢進症といった続発症の発症により治療を継続して必要となる。そして結果として肝病態の悪化からある程度の時間を経過してから肝移植を要する症例も少なくない。事実全国登録のデータから1年自己肝生存率は8割であるが、15年自己肝生存率は5割程度であり、15年で3割の患者が肝移植の適応となっている。 本症患者において、その臨床経過の中で肝病態の予測因子があることは、次の治療手段としての肝移植への準備を適切に行うために重要な要素であるが、いまだ確立されたものは存在しない。 当科は肝門部空腸吻合術を開発した施設であり、多数の症例を管理してきた。よって、今回は当科における本症の臨床経過、検査データならびに機能的画像検査の検査結果を集積してあらたな予後因子の探索を行う事を目的とした。
方法 対象は当科で1991年から2014年2月までに胆道閉鎖症の手術ならびに治療を行った患者のうちで臨床経過が把握でき、経過中に機能的核医学検査（肝アシアロシンチグラフィと肝胆道シンチグラフィ）ならびに採血検査を同時期に施行した50例である。 対象症例において診療録、採血検査データ（血液検査（白血球数、赤血球数、ヘモグロビン値、血小板数）、総タンパク、血清アルブミン、AST、ALT、 γ -GTP、ALP、LDH、中性脂肪、総コレステロール、総胆汁酸）ならびに画像検査データ（肝アシアロシンチグラフィと肝胆道シンチグラフィ）を後方視的に参照して検討を行う。 対象症例から得られた数値データを因子分析の手法を用いて、その背景にある共通因子を探索する。またこの得られた共通因子の有用性を確認するために、対象患者の肝移植の有無をアウトカムとするROC解析を行う。
問い合わせ・苦情等の窓口 東北大学病院 小児外科 佐々木英之 980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 電話 022-717-7237